

『必携 英単語 LEAP』に抱く熱き思い

竹岡 広信

1. CEFR-J Wordlist Ver 1.3 を全面採用

CEFR-J は、欧州共通言語参照枠(CEFR)をもとに、日本の英語教育での利用を目的に構築された英語能力の到達度指標です。今回『必携 英単語 LEAP』の執筆に際して、東京外国語大学の投野由紀夫教授からその Wordlist の使用をご許可して頂いたことで、本書の見出語に CEFR レベルを掲載して、その語彙難易度を明示することができました。

すでに実施された大学入学共通テストの試行調査でも、公式解説に CEFR-J が使用されており、この指標は従来の英語教育を実用英語へと加速させる武器になると考えています。

2. Active Vocabulary (Part 1, 2) と Passive Vocabulary (Part 3, 4) の線引き

『必携 英単語 LEAP』は、単語集としては異例の約 500 ページです。これは、Part 1～4 のすべての見出語に「語のイメージ」や「暗記するための手がかり(語源や語呂合わせなど)」をできる限り掲載して、英単語の「丸暗記」にならないように工夫し、さらに、Part 1, 2 にあたる Active Vocabulary (発信語彙)には「使えるようにするための詳細な解説」を掲載したためです。

すべての単語を Active Vocabulary として使いこなせるようになることが理想ですが、実際には困難です。よって、英語を母語とするコンサルタントの意見を取り入れつつ、高校生が writing や speaking で使う可能性の高い語を Active Vocabulary に、使う頻度が低いと考えられるものは Passive Vocabulary に分類しました。ただし、これは Passive Vocabulary に分類した単語は「使わなくてもよい」「使ってはいけない」という意味ではなく、Active Vocabulary に分類された語を「自由に使いこなせるようになる」ことを重要視した結果です。

本書は Part 1 から Part 4 までの約 1,900 語で構成されています。まず、Part 1 では主に、CEFR レベルが A1, A2 の語で、かつ「日本人が英作文や発話

で最も使う語」を 400 語に厳選しました。agree / mean / communicate / effort など「これは本当によく使う！」という語ばかりです。それらをジャンル別にグルーピングして、類義語の微妙なニュアンスや用法の比較ができるようにしました。Part 2 では、主に、CEFR レベル A2, B1 の語を中心として「日本人が英作文や発話でよく使う語」を 600 語選びました。relationship / statistics / destination などです。どれもこれも「これも使うだろうな」という単語です。ただし、CEFR レベルが B2 でも、他の単語で言い換えることができず、かつよく使う単語(environment など)もこの Part 2 に収録しました。

もちろん、Passive Vocabulary を扱う Part 3, 4 に収録されている見出語の中にも、英作文で使う可能性のある単語もあります。「これは使うよ」という声が聞こえてきそうな単語もあります。たとえば geography 「地理」(CEFR レベル B1) という単語です。確かに一見よく使いそうですが、「詳細な使い方」を学習する必要があるとは思えません。このような語は Part 3, Part 4 に回しました。

CEFR レベルは確固たる evidence となります。実際に英作文の指導経験があれば、「Active Vocabulary と Passive Vocabulary の線引き」の基準として「この単語は生徒には無理があるな」などが直観でわかるでしょう。しかし、それだけでは生徒に対して evidence が示せません。たとえば、生徒に「seldom は使わないほうがいいよ」と言っても、さまざまな「参考書」に seldom = rarely = hardly ever と書いてあれば、「なぜダメなのですか？」と食いがられてしまいます。その場にネイティブスピーカーがいて“Seldom' is seldom used.”などのパンチのある一言を頂ければ生徒も納得するでしょうが、授業にネイティブスピーカーが常駐しているわけではありません。これからは「seldom は CEFR レベルで B2 だから、かなり頻度の低い単語だよ」と言えば、生徒も納得せざるをえなくなります。これは非常に大きな武器です。こ

ういった意味でも、本書の見出語に CEFR レベルを掲載する意義は大きいと思います。

3. 語のニュアンス、類義語の意味の相違を伝える工夫へのこだわり

各単語のニュアンス(イメージ)を伝えるための工夫をしました。まず各単語のニュアンスをできるだけ簡潔に述べました。たとえば individual (Part 2) の項目では、「(社会、集団を意識している場合の)個人、個体」、collapse (Part 4) の項目では「突然、がくっと崩れる。日常では fall down と表現することが多い」というニュアンスをつけました。

そして、「グルーピング」によって意味の似た語を並べ、その使い分けを示しました。たとえば stare 「じっと見る」(Part 2) のニュアンスは「(意識的に)じっと見つめる」ですが、gaze 「(無意識のうちに)じっと見つめる、見とれる」と並べることで、自然と語の使い分けができるように工夫しました。

Active Vocabulary (Part 1, 2) には「頻出」「注意」という項目を極力掲載しました。「頻出」には「発信」を前提として必要だと思われる重要な熟語、定型表現を厳選し掲載しました。また、「注意」には、その語を使った「発信」で、生徒がよく間違えるポイントを掲載しました。たとえば、skill の「頻出」では improve [develop] one's ~ skills 「~の力を伸ばす」を掲載しました。この skill を複数形にできる生徒は非常に少ないからです。spoil の「頻出」では spoil one's fun [one's appetite, one's plans, the party] 「楽しみ [食欲, 計画, パーティ] を台無しにする」と単語が使用される場面を提示しました。phenomenon の「注意」では「日本語では『~という現象』と表現するが phenomenon は that 節はとらない([×] a phenomenon that S V)」, symptom の「注意」では「(病気の)症状はさまざまな形で現れるので通例複数形」。また、culture を「文化」と覚えていても、「温泉は日本文化です」を Hot springs are an aspect of Japanese culture. と書ける生徒はほとんどいません。そのため、culture の「注意」には Japanese culture の場合 culture は日本文化全体を表す不可算名詞であり、「その中の1つ」であることを伝えるためには an aspect of ~が必要となることを説明に加えました。

4. 基本動詞へのこだわり

英作文の授業をしていると、頻繁に登場するのが

基本動詞です。高校3年生の上級クラスでも「彼が昨日私に話してくれたレストラン」を the restaurant (that) he told me about yesterday と書ける生徒は10%もいません。なぜでしょうか? 答えは明白です。tell の用法を「きちんと」習う機会がなかったからです。「人に~を話す」を英語にする場合、〈tell+人+名詞〉となるのは例外的で、ふつうは〈tell+人+about+名詞〉だと習う機会が少ないのです。だから、生徒は、高校3年生でライティングをして初めて「基本語が運用できていないこと」に気がつくわけです。

現在、高校で使われている単語集の多くは、そのような(英語での「発信」に重要な)基本動詞を掲載していません。しかし、本書では、本編 (Part 1 ~ 4) の前提として、「基本動詞」を解説する項目を設けました。そこでは、まず、重要な基本動詞を42語厳選し、そのコアとなるイメージを伝え、active な用法を精選して掲載しました。基本語の解説は、どうしても「しつこく」なりがちなので、そのあたりも気をつけました。

また、42語の基本動詞以外にも、本編の見出語に time, throw, early, first, travel などを選び掲載しています。time はどのような場合に可算名詞で、どのような場合に不可算名詞かを覚えていなければ使えません。英作文を採点された経験がある先生なら time の間違いの多さを知っておられるはずですが、travel は、特殊な表現を除いて、名詞では使われません。よって動詞のみを提示して、解説で trip との違いに触れています。early と soon / quickly / fast との混同は、今までも嫌というほど見てきました。「いまさら early?」と思われるかもしれませんが、active には欠かせない単語だと思い、本書では掲載しています。

5. 訳語、用法説明へのこだわり

訳語にもこだわりました。特に Active Vocabulary に分類した語には「使える形」を提供できるように熟考しました。たとえば discover の意味は「①~を発見する ②(that S V)~を知る、に気がつく ③(知るという意味で)~に出会う」としました。discover は日本語の「~を発見する」より幅広く使えます。たとえば、discover the cause of the fire 「その火事の原因を見つけ出す」、discover that the painting is a fake 「その絵が偽物であることに気がつく」、discover the Beatles 「ビートル

ルズに出会う」などの使い方も知る必要があります。

6. 丸暗記を打破！

『試験に出る英単語』という一世を風靡した単語集がありました。竹岡も買いました。これには各単語に語源が掲載されていました。たとえば **invent** なら **in-[上]+-vent[来る]** と表記されていました。ところが頭の硬かった当時の私は「in は[中]やろ！」と、**in** = [上] に耐えられず、そこに書かれている語源を一切無視することになりました。in = [上] のような記述は、語源に詳しい人は抵抗なく受け入れられるのですが、その当時の私のように「融通の利かない人」には余計な負担となり、「語源 = 面倒くさい」という先入観を持たせかねません。そこで、本書では、そのような負担を軽減するために、語源を示す場合には、その連想の過程をできるだけかみ砕き、具体的に示し、さらに、同語源の単語を掲載することで理解を深める工夫をしました。たとえば **precise** 「正確な」は **pre-[前に]+-cise[切る]** から「あらかじめ切りそろえておいた」→「正確な」と掲載し、同語源の語として **concise** 「簡潔な(←すべて切りそろえた)」を紹介しています。

語源とは本当は「音」を中心として編んでいくもので、「なんとなく音がつながっていくな」という認識が肝心なのです。baby 「赤ん坊(意味不明な言葉を話すもの)」、barbarian 「野蛮人」、barren 「(野蛮人の住む)不毛の(地)」、brave 「勇敢な(野蛮な)」とつながるわけです。頭の硬い人なら「bar- と bra- は違うじゃないか！」と言いますが「あきはばら」は元々「あきはばら」であったことを知れば納得するかもしれません。ほかにも mouth は「口(突き出たもの)」、mountain 「山(突き出たもの)」、menace 「脅かす(突き出る)」を何となく「m- の音の共通点があるよね」くらいの認識でとらえることが肝心なのです。「なんとなく音がつながっている」という認識ができれば上級者の仲間入りです。本書では、その「なんとなくつながっている」「覚えやすい」にとことんこだわり、かつ「従来の語源説明の煩雑さ」をぐっと軽減させました。たとえば spur 「～を駆り立てる」は、名詞形の spurt が「ラストスパート(ゴール付近で全速力を出すこと)」の形で使われることを示すことで覚えやすくしました。

そして、語源での説明が難しい語には、外来語や「語呂合わせ」を採用し、疲れた頭を休めてもらう

ようにしました。cattle 「(集合的に)牛」の語呂合わせは「うちの実家では、「牛」を飼っとる」です。

7. 覚えやすいフレーズを採用

本書は、丸暗記しなくても覚えられる工夫が十分に施してありますが、さらに「フレーズ」で覚えられる工夫もしました。できるだけ語のイメージを伝えられるフレーズを、英語を母語とするコンサルタントと相談し厳選しました。ただし、フレーズだけでは語のニュアンスや使われる場面が十分に伝わらないと判断した場合には、例文を採用しました。

フレーズや例文は①「その単語の持つイメージを表しているか」②「active に分類された単語は、実際の英作文や発話へ使われるものになっているか」ということにこだわりました。たとえば、found は「基金を出して、学校や病院を創設する」という意味で、establish は「～を設立する(そしてそれが長年続いている)」という意味です。found a company では、establish a company と区別できません。よって、Our school was founded in 1900. という例文を採用しました。

8. 読解に必要な難語も網羅

Part 3 や Part 4 では、CEFR-J の Wordlist では B2 にも入っていないような難語でも、現在の大学入試状況や外部試験を鑑み、英文を読むにあたって必要であると思われる語は採用しました。見出語では deteriorate, expertise, quota などです。また、派生語や関連語などを充実させ、実際には網羅性の非常に高い英単語集となっています。

9. 最後に

色々書いてきましたが、実際に本書をご覧頂ければ、内容はもちろん、デザインなども含め、その魅力を存分におわかり頂けると思います。「LEAP」という書名は、Learn English Vocabulary, both Active and Passive 「英語の発信語彙も受信語彙も両方学ぶ」の頭文字を取ったものですが、同時に、生徒たちが四技能の英語世界へ「飛翔」してくれるという願いもこめました。この『必携 英単語 LEAP』を用いて、学生たちが「単語って楽しい！」と言ってくれることと確信しています。

(駿台予備学校講師、学研プライムゼミ特任講師、竹岡塾主宰)